
恐怖のハイテク肝試し決勝大会

はくび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恐怖のハイテク肝試し決勝大会

【Nコード】

N6097I

【作者名】

はくび

【あらすじ】

女子大生限定の団体戦で行われる肝試しの全国大会。ハイテク技術を駆使したお化け屋敷を、悲鳴を最小限に抑えクリアできたチームが優勝となるこの厳しい大会に、N女子大は初出場ながら見事決勝大会進出を果たした。しかし大会直前にまさかの欠員が出てしまった。やむなくその穴を埋めるため補充されたのが竹下彰子であった。しかし彰子は、暗い夜道を一人で帰れないほどの極度の恐がりであった。この事態によりN女子大が決勝を勝ち抜くことは、ほぼ絶望的に思われた……

第1話

N女子大の1年生である竹下彰子は、読書サークルの仲間にか
けられ我に返った。

「ねえ彰子。もう7時（夜の）だよ」

「えっ！ 本当に？」

読みかけの本を机の上に広げたまま、腕時計を確認する。

「本当だ。時間が経つのあつという間だな」

本に没頭するあまり、まるで時間感覚がなかった。

立ち上がると図書室の窓に近づき、カーテンを開けた。

空はうす暗くなっていた。季節は夏。もっとも日の長い時期だ。

彰子は背伸びをすると、ふう〜と大きく息を吐く。

がらんとした広い図書室に、サークルのメンバーが集まり、話をす
る者、本を読む者様々であった。

仲間が彰子のことを話す。

「彰子は大変だね〜 明るいうちじゃないと帰れないから」

「仕方ないよ。だって周りが真っ暗になったら、帰り道とか恐い
でしょ？」

「今どき中学生だって普通に帰るけどね。ハハハ」

笑いが起きる。その恐がりな性格は、笑いのネタにされることもし
ばしばであった。

「でもどうしても私は無理なのよね。そこは割り切っているだけ
ど」

「誰か一緒に帰る子とか探したら？」

「私もそういう友達欲しいけど、みんな帰り道反対方向なんだよね」

「そういえば、あなたのマンションに友達いたわよね？」

「うん。美香ね。高校からの同級生で、今も同じマンションで暮ら
しているけど」

「その子とは帰れないの？」

「それが…… あの子は『オカルトサークル』所属だから、いつも帰りは遅いのよ」

「ああ、そうかそうか！ オカサーの子ね！？」

N女子大の『オカルトサークル』通称『オカサー』は、今や学内にどどまらず、全国の大学の同系サークルからも熱い視線が向けられていた。

注目されるきっかけになったのは、日本中のお化け屋敷を舞台に毎年行われる『肝試し全国大会』。

昨年に第一回大会が始まって、今年が二回目であった。

この大会は女子大生限定の団体戦で行われ、優勝チームには100万の賞金が与えられるのだ。

その予選大会が春に行われた。

N女子大は全国から集まる強豪を退け、見事予選を勝ち抜き決勝大会に進出したのである。

決勝大会に進める大学は3校。

どの大学も選り抜かれた強豪である。そのひとつにN女子大が残ったことで、大学内は大変な騒ぎとなったのである。

N女子大の中でもまったく無名に等しかったオカサーの存在。

それがまさかの決勝大会進出。

運命の日はおよそ2週間後に迫っており、大会が近づくにつれて応援も熱を帯びていた。

彰子の友人である美香は、その決勝大会を戦うオカサーメンバーの一人なのである。

それもチームの中で1年生は美香だけ。他は2年生が3人。計4人の小さなサークルであった。

サークル仲間が彰子を笑う。

「でもおかしいものね。臆病者の彰子の友達が、真逆のオカサーメンバーなんてね」

「本当は違うのよ。私美香と高校で一緒だったからよく分かるんだけど、どこにでもいる普通の女の子よ。特別度胸があるとか、そう

いった部分もないし。私も入学した当初は、一緒に読書サークル入るうって誘ったけど、結局聞いてもらえなくて……」

「でも決勝大会まで残るってことは、それは本物じゃない？」

「そうなのかな……」

彰子は、高校時代から一緒に知らぬことなどないと思っていた美香の意外な才能に驚く今日この頃であった。

そして友達として、美香を全力で応援しようと決めていた。

しかし会場に応援に行くのは気が進まなかった。究極の恐れがりであるがゆえに……

仲間が言う。

「オカサーメンバーじゃ一緒に帰るのは無理ね。何しろあそこは暗くなってから本格的に活動開始っていうサークルだものね。まさに彰子と正反対だわ」

「そうなのよ。ここ最近は特に忙しいみたいで、まったく会っていないんだけどね」

「それはそうだろうね。優勝すれば100万でしょ？　つまり一人あたり25万ゲットできるチャンスだもん。気合入っていると思うよ」

「いけない！　もうこんな時間」

彰子は帰り支度を始めた。同時に仲間達の話にも耳を傾けていた。

「でも全国の3本指に残るって凄いやね！？」

「私達も応援しよう」

「そうだね」

支度を終わると。

「じゃあ先帰るね」

「気をつけてね」

「お先」

そう声を掛け、彰子は図書室を出た。外はまだ明るさが残っている。暗くならないうちに帰ろうと、急ぎ足で駐輪所に向かった。

駐輪所に着き、ふと気がついた。

自分の自転車の前に誰かが立っている。そしてこちらを見た。

「美香！」

それが美香であることが分かり安心した。

「彰ちゃん久しぶり！」

「久しぶり。元気にしてた？」

「うん。最近サークルの活動が忙しくて帰りが遅いうえに、寝坊して午前の講義さぼったり、ほんと時間がずれちゃっていてね」

「大変そうだね」

「彰ちゃんもまったく顔出してくれないんだもん！ 電話もくれないしさ」

「ごめんごめん。私も今夢中になってる本があつて、全然周りが見えてない状態なんだよね」

「あなたも変わらないわね。フフフ」

久しぶりに会った二人の会話は弾んだ。

彰子は聞いた。

「ねえ。こんなところでどうしたの？」

「うん。彰ちゃんと話がしたくて。自転車見たらまだあつたから、ここで待っていたの」

「そうか。ねえ、せっかくだから一緒に帰らない！？ 家で話そうよ！」

心躍る彰子に対し、美香の表情にはどこか陰が落ちていた。

「嬉しいけど、ゴメン…… ここで聞いてくれるかな……」

「う、うん。いいけど…… 美香どうかした？ ちょっと元気ないみたいだけど？」

「そう？ 実はこれからサークル仲間と集まるんだけど……」

「そうだよ。もうすぐ決勝大会だもんね！ 私も応援してるから頑張つてよ」

しかしオカサーの話に触れると、暗い表情を見せる美香。

「実はそのことで、ちよつと悩んでいるの」

「どうして？　ここまで来たんだからあとはやるだけでしょ？」

そして美香は小さな声で。

「私、出たくない……　今度の大会……」

「ええー！！??」

彰子は驚いた。

「出たくないって言ったって、もう大会すぐでしょ!？」

「そうだけど……　駄目なの。出る気持ちになれないの……　恐くて……」

「恐いって……　その気持ちも分からないではないけど……」

すると美香は彰子の肩を手でゆすりながら、必死に心の内を訴えた。

「もう我慢できないの！　私オカサー抜きたい！」

「ちよつと美香落ち着いてよ！」

彰子も困った様子。

「ご、ごめん……」

ひとまず落ち着いた美香だが、その目には涙が浮かんでいた。彰子が聞く。

「サークル辞めたいって言っても大丈夫なの？　チームとしては」

「駄目だと思う。サークルは今4人。一人でも欠けると団体戦として大会に出られなくなっちゃう」

「それは困ったね……」

高校時代からの親友の悩みに、彰子も頭を抱えた。

何か方法はないかと思考するが、良い案が浮かんでこない。

美香が小さくつぶやいた。

「私。もともと恐いこととか得意じゃないし……」

後悔を口にする美香に対し彰子は。

「だから私言ったでしょ？　一緒に読書サークル入ろうって。そうすればこんなことにはならなかったのに」

美香も主張した。

「私だってこんなことになるって知っていたら入らなかったわよ。もつと穏やかなサークルだと思ってた……　古い怪談話を研究した

り。最悪でも各地のお化け屋敷を回るとか……　そのくらいのサークルだと思っただけだよ」

「そうか……　でも実際は更に過激だったわけね？」

「そう。予選大会はなんとか頑張ったけど、それでも本当に死にそうなくらい恐かったんだから」

「それで今度の決勝大会っていうのも、そうとう恐いの？」

「最悪よ。聞いた話では、日本を代表するお化け屋敷プロデューサーが作った、ハイレク技術を使ったお化け屋敷らしいの。男の人でも腰を抜かすくらい怖いって話よ……」

「ひゃ〜」

話を聞いただけで彰子は背筋が寒くなった。

そして迷うことなく言った。

「美香！　それはやめるべきよ！　絶対無理！　棄権しよう！」

急に顔色を変え彰子は説得した。その言葉で美香の気持ちも少し楽になったようだ。

「やっぱり彰ちゃんもそう思う？」

「当たり前じゃないの！」

しかし美香はまだ悩んでいた。この大事な時期ということもあり、そう簡単に決断はできるものではない。それは彰子も分かっていた。「これからは読書サークルに入ろうよ。みんなすごい良い人ばかりだから」

「うん。そう出来るならば、そんなに嬉しいことはないわ……」

彰子はその言葉に笑顔を見せて頷いた。

すると美香は服のポケットから、ある手紙を取り出した。

「この手紙に書いたの。私の気持ち……　サークル辞めたいっていう」

「そっか」

美香の気持ちに賛同する彰子。

「じゃあその手紙サークルの人に渡してきなよ。私ここで待っているから。済んだら一緒に帰ろうよ」

しかし美香は素直に首を縦には振らなかった。

そして気持ちを乱した。

「駄目！ 絶対無理に決まってる！ 受け入れてくれないわ！」

「ちよつと美香落ち着いてよ。じゃあどうするの？」

「お願い彰ちゃん！ この手紙をオカサーの人に渡して来て！」

「ええ〜私が!!？」

「一生のお願い〜！」

「ちよつと待つてよ〜 この私に、オカサーの活動部屋のドアを叩いていうの!？」

「大丈夫。場所は教えるから！」

「いやそういう問題じゃ……」

「心配しないで。メンバーに怖い人いないし！ 室内もそんなに恐いもの置いてないから！」

戸惑う彰子に、ひたすら頼み込む美香。やがて彰子は折れた。

「わ、分かったわよ〜 手紙を届けるだけね」

「あ、ありがとう彰ちゃん！」

美香は彰子の手を握り喜んだ。それに対し、やれやれといった様子の彰子であった。

「本当は嫌だけど行くわよ。まあ、あなたの気持ちもよく分かったし。これからサークル一緒になれると思うと嬉しいし」

「本当に彰ちゃんだけが頼りだわ」

彰子は手紙を受け取った。

「じゃあ行つてくるけど、美香はどうする？」

「ここで待つてるよ。私の自転車は別の場所にとめてあるから、彰子が戻ってきたら一緒に来てくれればいいよ」

「うん分かった」

すると彰子は自分の自転車の鍵を外し、スタンドから引つ張りだした。

「私が戻るまで自転車にまたがっていていいよ。立ちっぱなしだと疲れるでしょ？」

そう言って自転車を差し出した。

「ありがとう」

美香は彰子の自転車にまたがった。

「じゃあ行ってくるね」

「うん。お願い」

彰子は一人校内に戻っていった。

第1話（後書き）

次回 - 14日予定

第2話

校内に戻った彰子は、美香の説明を頼りにオカサーの部屋を探した。
「——どこだろうな」 外もだいぶ暗くなってきたし。ただ
ど今日は美香がいるから大丈夫か」

あたりをキョロキョロしながらそんなことを考えていた。

そして、ようやくそれと思しき部屋を見つけた。

古びたドアが妙に不気味に見えてしまう。

締め切られたドアに近づくと、中から数人の話し声が聞こえる。

恐る恐るノックしてみる。すると勢いよくドアが開き。

「ちよつと木田さん遅かったじゃ…… あれ??」

「あゝ失礼します。私…… あゝ」

中から慌てた様子で部員が飛び出してきた。彰子はさながら幽霊と勘違いしたかと疑うほど、瞬間的に体が硬直してしまった。

「あなた誰？」

「はい。木田美香の友人で、竹下といいます」

「友人で…… 木田さんはどうしたの？」

「はい。美香からこの手紙を預かってきました」

「手紙？」

「これです」

彰子は手紙を手渡した。用事を終えたので、すぐに引き返そうとした。

「では私はこれで……」

ガチガチに緊張した声でそう言うと、踵を返した。
しかし呼び止められてしまった。

「ちよつと待ってよ。木田さんは何で来ないの？ あなた何か聞いているの？」

「そ、それはその手紙の中に書いてあるそうです」

「手紙の中って……」

彰子は心の中で、早く解放してくれと強く願っていた。

手紙を受け取った部員は部屋の中に向かって大きな声を出した。

「アサギさ〜ん！ これ木田さんからの手紙らしいです！」

「手紙！？」

部屋の奥からアサギと呼ばれた人が姿を現した。そして彰子と目が合った。

女性らしいたたずまいではあるが、勝気で男勝りといった印象。

そう彰子の目には映った。

「あなたは？」

「木田美香の友人です」

「そう」

彰子はペコリと頭を下げた。

アサギは手紙を受け取ると、彰子に対し言った。

「私サークル長をやっている者だけど、中に入って話聞かせてくれない？」

「いいえ私は結構です！」

中に入るなどんでもない。

それより一刻も早く逃げ出したい。それだけであつた。

アサギは手紙を広げ、スラスラとその内容に目を通す。

次第に表情が険しくなっていた。

「ちよつとこれどういうこと！？ 木田さんがサークル辞めるって！」

アサギの一言に部員全員が驚いた様子で集まってきた。

サークル長のアサギ。始めに部室から顔を出したル力。もう一人はルミであつた。

3人とも顔を寄せ合い、手紙の内容を目で追っていた。

まずい展開である。彰子は後悔した。手紙を読まれる前にこの場からいなくなるべきだったと。

一通り目を通したアサギは彰子に聞いた。

「ねえあなた！ この手紙を受け取ったっていうことは木田さんの

いる場所知っているんでしょ!？」

「え？ は、はい……」

いいえ知りませんと嘘をつく勇氣はなかった。

「すぐその場所に案内して!」

これは大事になったと彰子は思った。

やむをえずオカサーの3人を連れ、美香の待つ駐輪所に向かった。

3人の表情は真剣そのものだ。

美香という存在の重要さが伝わってくる。

ややこしいことになってしまったが、もう後戻りはできない。

それに美香も手紙だけでなく、しっかり会って話す必要があるのではないかとも思った。

オカサーの3人はたえず個々に美香の名を呼んでいた。

「木田さん!」

「木田美香! どこ!?!」

ようやく駐輪所に到着した。

彰子の自転車は先ほどと同じ場所に置かれていた。

しかし美香の姿はなかった……

「木田さんは何処にいるの!？」

「ここで待ち合わせたのですが……」

「ここで!？」

3人は再び美香の名を呼びながら、あたりを探しまわった。

彰子は考えた。

「——おかしいな。もしかしたら先に帰っちゃったのかな……」

でも美香は約束を破る子じゃないし……

自転車のサドルをさわってみると、まだ温かった。

「——つい今までここに座っていたよね。でも遠くでサークル仲間の声が聞こえたから逃げ出したって感じがしら」

彰子はそう推測した。

まだ近くを探せば見つかる可能性はあるとは思ったが、そこまでする気持ちはなかった。

そしてサークル長のアサギに言った。

「どうやら先に帰っちゃったみたいですよ」

その言葉にアサギは、額に青筋を立てて声を荒げた。

「帰っちゃったじゃ澄まされないのよ！ 今日では大会本部に、決勝大会の正式メンバーを申請する日なの！ あの子がいなくなったらどうなると思うの！？ メンバーが足りなければ決勝大会に出られないのよ！」

なんで私が怒られるのか…… 彰子は疑問に思いながら話を聞いていた。

アサギ達は諦めるどころか、より一層声を張り上げ美香を探した。

この様子では彰子もすんなり帰してもらえそうにない……

そう思った彰子はある決断をした。

「あの～みなさん！ 私の話を聞いてもらえますか！？」

「なあに話して？」

3人が寄ってきた。

「私さっきまで美香とここで話をしていました。美香は本当に今度の決勝大会に出る自信がないみたいで、そのことでずっと悩んでいたようなんです。あの子と私は高校の時から一緒なのでよく分かるのですが、けっこう臆病なところあるし、こういうオカルトだとかお化け屋敷みたいなものは苦手だと思うんです。今後は私と一緒に読書サークルに入りたいとも言っていました。なので、許してあげてください」

それに対しアサギが。

「じゃあ私達の今までの苦労はどうなるっていうの？ 苦労して予選を闘ってきたし、今では大学を挙げて応援するまでになっているのよ。それを全てなかったことにしろって言うの！？」

「そうは言いませんが、美香の気持ちも分かってもらいたいです」
彰子は美香の気持ちを説明した。その説得にアサギの口から驚く一言が。

「分かったわ……」

「え?? 本当ですか?」

彰子は驚いた。こつも簡単に? しかし裏が隠されていた。

「木田さんは諦めるわ。その代わり…… あなたが出てちょうだい!」

「え?? それってどういうことですか?」

「どういうことって、簡単よ。木田美香さんの代わりに、あなたが私達のチームに入って決勝大会を戦うってことよ」

その言葉に彰子は頭が真っ白になった。

第2話（後書き）

次回 15日予定

第3話

彰子は即座に拒んだ。

「無理です！ 私は絶対無理です！ そういうの本当の本当に駄目なんです！」

「仕方ないでしょ？ 木田さんがいなくなっちゃったんだから」

「お願いです。誰か違う人を探してください！」

「そもいかないのよ。私達これから、メンバー申請書を本部へ届けに行かなければならないのよ。今から他の人をあたって説明している暇はないの」

アサギの態度を見る限り冗談ではなさそうだ。

彰子は心の中で叫んだ。

「——美香の馬鹿——！！ そんなこと一言も言っていなかったじゃないの——！！」

「あなた竹下さんっていったわよね？」

アサギは内ポケットから紙を出した。

「ここに名前とハンコを押して」

「無理です！ 絶対無理です！」

彰子はあくまで抵抗した。暗い夜道すら恐がっている人間が、最新のハイテクお化け屋敷の恐怖に耐えられるはずがない。しかしアサギは甘い顔ひとつ見せることなく続けた。

「だったらすぐに木田さんを連れてくるしかないわね」

彰子は心の中でまたしても叫んだ。

「——美香の嘘つき——！！ 全然優しい人なんかじゃないじゃん！」
「早くサインして」

申請書突き出すアサギに対し、彰子はあくまでも首を縦に振ろうとはしなかった。

アサギはさらに詰め寄る。

「木田さんが読書サークルに入りたいなんて、どうせあなたが誘っ

たんでしょ？　だとしたらあなたにも責任があるってことよ」

「そんなこと言われても……」

彰子は追い詰められ、苦し紛れの一言を発した。

「今度の大会は棄権してくださいませんか！？」　生徒会には私のほうから話しますので」

しかしそれはアサギの燻った気持ちに油を注ぐようなものだった。

「あなた何も分かってないわね！　オカサーのことも、私達が大会に出場する理由も……　いいわ。この際だから教えておくわ。オカールトサークルはね、今年の4月に出来たばかりで、まだ大学の公認サークルとして認められていないのよ。資材や備品なんかも大学のほうから何ひとつ支給されないわけ。つまり全部自費で揃えるしかないのよ。でも当然そんなお金ないわ。途方にくれていた時今回の大会の記事を見つけたの。優勝すれば100万円。そのお金があればサークルに必要な最低限の物は揃えることが出来る。分かった？　私達の目的……　それともあなた、私達に100万円出してくれるとでも言うの？」

「そ、それは……」

無理な話に返す言葉が見つからない。

「ちよつとアサギさん。そんなに責めたら可愛そうですよ」

彰子に同情したルカとルミがフォローに入った。

「そうですよ。この子は、ただ木田さんの手紙を届けに来ただけだし、オカサーとは関係ない人だし……」

「それはそうだけど……」

アサギも少し言い過ぎたと反省した。

ルカとルミは彰子に温かく言った。

「ねえ竹下さん？　私達のチームに入っても、そんなに恐がることないと思うよ」

「そうだよ。大会中のお化け屋敷とかは、全部私達が先頭を歩くから、あなたは一番後ろからゆっくりついて来てくれればいいよ」

「そうそう。それに皆で恐くないように話とかしながら行くのよ。」

それだけでけっこう紛れるんだよ」

「それでも本当に恐くて仕方なかったら、その場で棄権して外に出ることも出来るし」

「ね？ それだったら大丈夫そうでしょ？」

「あなたは無理しないでいいから。形の上、紙の上だけのメンバーでいいのよ」

二人の話を聞いているうちに彰子の先入観は少し変わった。

「本当にそれだけでいいのですか？」

「もちろん！ ね？ アサギさん！？」

「え？ う、うん……」

アサギも頷いた。そして彰子は、やむなく了承することにした。

「分かりました。やります」

それは彰子にとっては驚くべき決断であった。

何てことをしたのだろうと後で後悔することになるのである。

少し前までは考えられなかった出来事が、現実のものになっていた。しかし美香の事を考えると、自分が代わるしかないといった気持ちになる。

彰子は申請書に名前を書き、判を押した。

アサギら3人もホッとした表情を見せた。

するとアサギが右手を前に出した。その上にルカとルミも手を乗せた。そして彰子に言う。

「ほらあなたも乗せて」

言われるがまま手をそつと乗せた。

「今度の決勝大会。このメンバーで頑張ろう！」

「おうっ！」

意気があがる3人だが、彰子は素直に喜ぶことは出来なかった。ひとつ引つかかる点があつたので聞いた。

「あのアサギさん。やっぱりサークル部屋にも、私顔出さないと駄目でしょうか……」

「ハハハ。随分と嫌われちゃったかな。あの部屋」

アサギの態度も朗らかになっていた。

「別にいいよ。無理しなくても。大会当日にちゃんと合流してくれれば」

「そうですか。分かりました」

彰子も気が楽になった。あのオカルト部屋に出入りするのだけは気が進まなかった。

「じゃあね竹下彰子さん」

フルネームを呼ばれ若干照れる彰子。

アサギが手を振り、3人と別れることになった。

気がつけば外はすっかり日が落ちて真っ暗であった。

美香が先に帰ってしまったことで予定が狂った。一人で帰るしかないのか。

彰子は思い切って3人を追い、声をかけた。

「あの〴〵皆さんの家はどっち方面ですか？」

「え？」

意外そうな顔をして振り向く3人。あいにく彰子と同じ方向の人はいなかった。

「どうしたの竹下さん？」

「実は私…… 恥ずかしい話なんですけど、暗い夜道を一人で帰れないんです。恐くて……」

「はあ???」

呆氣にとられる3人。

「恐いって、あなた何歳よ!？」

「すみません……」

彰子は照れ笑いした。

ルカとルミがアサギにつぶやく。

「アサギさん。もしかして私達、もの凄い貧乏くじ引いちゃったんじゃない……」

「貧乏くじどころじゃないでしょ……」

「仮にも決勝大会に出場するメンバーですよ……」

「完全に望みゼロね……」

「そのへんの小学生を誘ったほうがまだましかも……」

「本当に棄権したくなってきたわ……」

3人の口からはそんな言葉が漏れた。

彰子は心の中で思った。

「——だから私なんか誘わないほうがいいって言ったのに……で
も別に期待されているわけじゃないんだし、いいけど」

彰子はアサギに言った。

「大丈夫です。私タクシーで帰りますから」

「タクシーって……じゃあ一人で帰れないっていう話は嘘じゃないのね？」

「ええ。本当ですよ」

ますます頭を抱えるアサギだが、きっぱり言った。

「分かったよ！ 私、車だから家まで送っていくよ！」

「本当ですか？ でも自転車ないと明日が困るし……」

「明日も迎えに行くから。それでいいでしょ！？」

「ええ！？ いいんですか？ ありがとうございます」

こうしてアサギに家まで車で送ってもらった彰子。

車から降りるとアサギに礼を言い別れた。

サバサバしたアネゴ肌の、とてもいい人だと思った。

美香の言っていた意味がちよっと分かった気がした。

決勝大会はもちろん恐いけど、あの人達と一緒になら何とかなるかも、
とも思えた。

自分は仮のメンバーだから無理する必要もない。

そう考えると気持ちは楽になった。

マンションに着くと、まず美香の部屋に向かった。

「美香の自転車がある。やっぱり帰ってきてたんだ」

呼び鈴を鳴らしてみるが出てくる気配はない。そこに大家さんが顔
を出した。

「おや竹下さん？」

「大家さんこんばんは。美香は帰ってきましたよね？」

「うん。少し前にね。でもまたすぐ荷物がついで出かけちゃったよ」
「本当ですか？」

「いったい何処に行ったのか気になった彰子だが、ふと携帯にメールが入っていることに気付いた。」

「見るとそれは美香からのメールだった。」

「大家さんありがとうございます」

「礼を言い一人になった。そしてメールを開き、読んだ。」

『彰ちゃん、先帰っちゃてごめん。アサギさんたちの声がしたから思わず逃げちゃいました。今日は正式メンバーの登録をする日だったの。そのことも隠してごめん。どうしても私、サインする勇気がなくて。きつとアサギさん達怒っていたでしょう？ 申請日当日に逃げちゃったりして、アサギさん達には本当に申し訳ないことをしたと思ってる。もちろん彰子にも。本当にごめんね。でもこうするしかなかったの。今私は電車の中です。最近色々あってちよつと疲れたので、気持ちが悪くまで実家に帰ろうと思います。また大会が終わって、私の気持ちも落ちついてきたら戻ろうと思います。でも私のせいでアサギさん達が決勝大会を欠場することになったら私どうすればいいか…… そんなことばかり考えてしまいます。やっぱり彰子に勧められた通りに、始めから読書サークルに入っていればよかったのにつて後悔しています。今さらだよ。そんな訳で、しばらくそつとしておいてください。じゃあまたね彰ちゃん』

始めはちよつぱり怒っていた彰子だが、メールを読んでいるうちに心の熱が冷めた。

美香の気持ちは手紙から痛いくらいに伝わってきた。

「——本当に辛かったんだね。美香……」

心配をかけないようにと彰子もメールを打った。

自分のメールで美香を少しでも元気にしたかった。

『美香心配しないで大丈夫だよ。美香の代わりに、なんと私が出る
ことになっちゃいました！ 嘘だと思っっているでしょ？ 絶対無
理だと思っっているでしょ？ 無理なのは当たっているけど、出場
するのは本当です。私も最初は本当に嫌だったんだけどね。アサギ
さん達は、やっぱり始めはそうとう驚いて、怒っている感じもあつ
たけど、私がメンバーに加わるってことになったら、安心してかみ
んな笑っていたよ。美香の言うとおりみんな良い人だね。お化け屋
敷は怖いけど。私のことは心配しなくてもいいよ。みんな私が極度
の恐がりっということを合意の上で接してくれるみたいだから。私
が夜道を一人で帰れないって言った時のみんなの顔は傑作だったな
〜 これは私の想像だけど、みんなの目的は優勝よりも、大会を楽
しむっていう方向に変わってくれたんじゃないかって思う。だって
私が入った時点で優勝はありえないもんね。でも私なりにやれるだ
けのことはしてみるつもりだから応援してね。美香も早く元気にな
って戻ってきてください。 彰子』

メールを送信し、彰子は部屋に帰った。

第3話（後書き）

次回↓18日予定

第4話

彰子が正式メンバーとなつた2週間後。ついに決勝大会の日を向かえた。

今年で2年目となるこの大会。

昨年に引き続き、進行役のアナウンサーによって開幕が告げられた。「さあ今年もやってまいりました肝試し決勝大会。今回勝ち進んだのは名門A大学！そしてなんとといっても、記念すべき第1回大会優勝のB女子大！そして初出場ながら決勝に進出した台風の目、N女子大であります！」

ひとつひとつの大学名が呼ばれる度に、応援にきた関係者の大きな歓声が上がった。他にも大会の熱狂的なファンも多く集まった。盛り上がりを見せる中、3大学の出場チームメンバーがステージに上がった。

N女子大は3番目であつた。

そしてメンバー一人一人が意気込みを述べた。

「——うわー　すごい人の数……　まさかこんなに大きな大会だとは知らなかった」

開幕から緊張がピークの彰子。

「彰子ー！！　ガンバレー！！」

駆けつけたサークル仲間の声など、彰子の耳にはまるで届かなかった。

そしてインタビューが進み、アサギにマイクが向けられた。

「さて、続いては注目のN女子大チームの主将であるアサギさんです！　自信のほどは？」

「私達のサークルは今年の春に出来たばかりなので、正直不安のほうが大いですが頑張ります」

「そうのですかー　今年できたばかりで決勝に進んだわけですか

ら、これは凄いと同時にとても楽しみです。さて次の方？」

ルカにマイクが向けられた。

「私はキャプテンのアサギさんにひたすら付いて行こうと思います」
「なるほど」 それでは次の方」

ルミの番。

「私は喋ることが得意なので、とにかく喋ってチームのみんなの恐怖心を紛らわすことが出来たらいいです」

「これは心強いですね」 さて最後の方」

ついに彰子にマイクが向けられた。ガチガチで何を話せばいいか……
思うように言葉が出てこない。

心配そうなアサギ達の視線を彰子は感じた。

全ての人の視線が自分に集中している。こういった経験のない彰子には、お化け屋敷に匹敵する地獄であった。額に汗がにじんでいた。
何か話さなければと焦る彰子に、アナウンサーのほうから。

「おや?? 今気がつきましたけれど、あなた新メンバーですね?
私予選からずっと見てきましたので分かりました」

「はい。私は大会直前にチームに入りました」

「なるほど」 N女子大の秘密兵器ってわけですね? これはますます期待できそうです！」

アナウンサーの言葉に思わず吹きだしそうになるアサギ達。
その内心は。

「——ちよっと、彰子のどこを見たら秘密兵器に見えるのよ??」

「——お化け屋敷入る前から震えてる秘密兵器なんて聞いたことないわ！」

クスクス笑っていた。

インタビューが終わると各大学のチームメンバーはステージから降りた。

続いてアナウンサーは、観客に向けて決勝大会のルール説明を始めた。

「さて！ 各チームの紹介はここまで！ 次は大会のルールを簡単に説明いたしましょう。今回の舞台となるハイテクお化け屋敷は計3ステージで成り立っています。屋敷内では常にスクリーン値というものが計測されます。これは絶叫や悲鳴をあげるたびに加算されるポイントです。この計測器は優秀なことに、悲鳴意外の声にはまったく反応しません。正確に恐怖を感じ取ることができるのです。このスクリーン値を低く抑えることが勝利の鍵となります。そして3ステージ終わった時点でスクリーン値が最も低かったチームが優勝となるわけです。また屋敷内で恐くなって逃げ出したり、座り込んでしまうなど、継続不可能と判断された場合は失格となります。メンバーは常に屋敷内は歩かなくてはなりません。各ステージ1チーム4人で挑戦してもらいますが、もしステージ中にメンバー全員が失格になってしまった場合は、その時点でそのチームは失格。敗退となり次のステージには進めません。逆に4人中3人が失格となっても、1人がゴールできれば、それでステージはクリアとなり次のステージに進むことができます。そして次ステージは、再び4人で挑戦できるというわけです。また必ずしも4人で挑戦する必要はありません。1人で挑戦することも出来ますが、この場合その1人が失格となった時点でチーム全体が失格となってしまうです。ですから基本4人でチャレンジという形になるわけです。これが大まかなルールです」

会場に集まった人は頷きながら聞いていた。

「さて、続いてステージとなるお化け屋敷ですが。実は屋敷ごと移動できるもので、このステージの隣に並べて設置されます。やや大掛かりな作業にはなりますが、1ステージが終わったら次のステージと…… 計3回屋敷の移動設置作業を行うので、その間1時間ほどの休憩を取らせていただきます。そして屋敷内部の様子は、このステージ上方の大画面モニターに映されますので、皆さんメンバーを精一杯応援してくださいね」

ステージ上方に設置されている巨大モニターの幕が外された。

場内から歓声が起こる。

「それではさっそく第1ステージの設置に移りたいと思います。大型トラックが入ってきますので、ステージ左側のお客さんは後ろへ移動してください」

そして巨大なバンがバックで会場入り。ステージに近づいてきた。

荷台の上にはプレハブ倉庫を思わせる平屋の建物。

それが第1ステージだ。

色はなんと綺麗な虹色をしている。とてもお化け屋敷には見えない。

なんとも意味ありげであった。

10人以上の誘導を受けながら、ようやくステージ横に設置された。場内から拍手が起こる。

「というわけで、こちらが第1ステージとなります。全長はおよそ15m。全ステージ共通している点は、入口と出口が赤いドアとなっていることです。つまり入口の赤いドアから入り、出口の赤いドアから出ればゴールです。そしてゴールすると必ずこのステージ上に出てくるという仕組みになっています。もし挑戦者がステージ上に現れたときは皆さん盛大な拍手で迎えてあげてください」

誰もが納得しながら聞いていた。

「では少しだけ屋敷内部の様子を見てみましょう」

すると大画面モニターにその映像が写った。しかし内部の様子は屋敷の外観と似たような、カラフルな色をしている。

恐さのカケラは一切ない。

「先ほどからおそらく皆さん疑問をもたれているかと思いますが、屋敷の外側も内部も特徴的な色をしています。何ともカラフルです。これは一体何なのか？ 本日はある方をゲストにお呼びしています。今回のお化け屋敷の制作、設計デザイン全てを手がけた日本を代表するお化け屋敷プロデューサー。ムラヨシ先生で……す！」

紹介を受け、ムラヨシがステージに現れた。

「ではムラヨシ先生の方から説明をお願い致します」

「どうもご紹介に預かりましたムラヨシです。ご説明致しますと今回のステージにはちよつとしたカラクリがあります。もちろんこの屋敷のカラフルな色もそのひとつです。しかしその前に、ある方に登場してもらいましょう」

会場が静まる。

「その方というのは、これから行われる各ステージに登場し、挑戦者の皆さんを恐怖のどん底に突き落とす役割を担う方です」

「え〜！」

場内がざわついた。急な展開にアナウンサーが。

「あの〜先生ひとつよろしいですか？ その方つてもしかしたら、もの凄く怖い方なのではないのでしょうか？ 会場にはそういうのが苦手な女性も多くいますし、大丈夫でしょうか？」

「ハハハ。まさに仰る通り、とても恐ろしいキャラクターです。でも安心してください。ではお呼びしますよ」

「え〜！ キヤ〜」

場内に歓声と悲鳴が交錯した。

ムラヨシはパチンと指を鳴らした。

場内に緊張が走る。

しかし何も現れる気配はない。誰も出てこない。いったい何がどうなったのか？

不思議な空気が会場を包んだ。

すると満足そうにムラヨシが言う。

「皆さんお分かりになりますか？ 実は今、私の隣にその方をお呼びしました。今私の隣に立っています」

「え〜！？ 嘘〜！ 誰もいないじゃない！ なに気味悪いこと言っているの〜！？」

「嘘ではありません。見えないのもそのはず。実はこの特殊めがねをかけないと見えないのです」

そう言うとムラヨシは、大きめのレンズをした奇妙なめがねをポケットから取り出した。

そしてステージの前方に歩いていくと、前列の人に。

「誰か試してみたい方いませんか？ 恐いもの大丈夫という方にお願います。このめがねで見てみてください」

そして一人の女学生がそのめがねを受け取り、めがね越しにステージ上を見るなり悲鳴をあげた。

「きゃー！！」

思わずめがねを床に放り投げてしまった。

アナウンサーがステージの階段から降り、めがねを拾うとその女学生にマイクを向ける。

「どうしましたか！？ 何が見えました！？」

震えながら女学生は答えた。

「女の人が…… 全身血まみれの女の人が立っていました！」

その言葉に大騒ぎとなる会場。

中には会場から逃げ出そうとする者も。しかしムラヨシがそれを静める。

「ちょっと皆さん落ち着いてください。大丈夫ですよ。これはただの演出です。実際には誰もいません。トリックです」

その言葉に安心してか、会場はひとまず落ち着きを取り戻した。

「驚かせてしまいすいません。そして今、彼女が驚きましたが、そのスクリーン値は100と出ました。特殊めがねに内蔵されているセンサーが悲鳴を感じているのです」

「よくできていますね。どれどれ……」

今度はアナウンサーがめがねをかけた。そして飛び跳ねた。

「うわああ！ これはリアルですね…… 本当にこのめがねをかけると見えます。それにもう一つ驚いたことがあります。屋敷の外観も、このめがねを通すとしても恐ろしく変化しました。立体感があり恐怖を引き立てますね」

「分かって頂けましたか？ これが今回のお化け屋敷のカラクリです。ちなみに彼の今のスクリーン値は30でした。このように少しでも声を上げたり驚いただけでスクリーン値はどんどん上昇するわ

けです」

「なるほど。これが4人になるとどうなるのか？ 単純に1人の4倍スクリーン値が溜まってしまふのか。それとも励ましながら行くことで、1人の時よりスクリーン値を抑えることができるのか？ その辺も見所であります」

アナウンサーが感想を述べると、再び客席にめがねを差し出した。「どなたか他に見てみたいという方いますか！？」

集まった大部分は女子大生ということもあり、皆引いてしまったようだ。

アナウンサーは再びステージに上がりムラヨシに尋ねた。

「ということは挑戦者全員がこのめがねをかけて望むということですね？」

「その通りです。もし恐怖に耐えられなくなった場合は、すぐにこのめがねを外せば、恐怖から解放され何も無い空間に逃れることが出来ます」

「ということは、このめがねを取った時点で失格になる。と……」

ちよつと今ふと思ったのですが…… 私今ムラヨシ先生の隣で話していますが、ここは例の女性が立っていた場所でしょうか？」

「ビンゴ。ぴつたり重なっていますよ」

「うわああ！」

反射的に一歩退くアナウンサー。

「今重なつてしまいました、私呪われませんよね？」

「ハハハ。心配することはありませんよ。ただの幻影ですから」

「ああよかった…… 私、現在めがねをかけてなかったから平気でしたが、していたら失神していたかもしれない」

「めがねをかけていたらステージに上がるのも度胸いるでしょうね。今アナウンサーの彼がお化けと重なっていました、このトリックは面白いことに、このお化け、私はタタリンと呼んでいるのですが、そのタタリンと実際の人間が重なった状態で、外から特殊めがねで見ると実際の人間の姿は消えてしまふのです。タタリンのみが見え

る。そんなシステムになっています。まあちょっと蛇足でしたが」
「なるほど…… まさにハイテクの力といった素晴らしい仕掛けです」

するとムラヨシは指をパチンと鳴らした。

「今の合図でタタリンは消えましたから大丈夫ですよ」

「本当ですか？」

念のためにめがねをかけて確認するアナウンサー。

「確かにタタリンはいません。ホツとしました…… しかし今回のマスコットキャラは本当に恐いですね！ おそらく大人の男性でも普通に無理という方も多いのではないのでしょうか」

「今回は意気込んで作りましたからね」

「なるほど。ところで先生はこの決勝をどう見ますか？」

「そうですね。私も今大会は予選から見てきましたが、どの大学もちよつとやそつとのお化けでは驚かない、私から見れば強敵ばかりです。しかし私も負けじと力作を用意していますから、今回は正直、失格せずに第3ステージをクリアできたチームがそのまま優勝となるのではないかと予想しています」

「そうですね。つまりスクリーン値など関係ないと。それだけ難易度の高いステージになっているということですね？」

「おっしゃる通りです。そこで今回私は審査員特別賞というものを設けました」

「ほう！？ それはどういった？」

「大会中でもつとも印象に残る活躍をした人にこの賞を送りたいと思います。なのでこの決勝大会には私が審査員長として参加させて頂こうと思います」

「つまりその賞は先生自身がお選びになるということですね？」

「はい。特別賞の賞金は30万です」

「なんと！ これは嬉しいハプニングです。挑戦者たちも気合が入ることでしょう」

「頑張ってもらいたいですね。無理をしない程度に」

「分かりました！ ということで今大会の審査員長も務めていただくムラヨシ先生でした！」

拍手が起こる。ムラヨシは一礼するとステージを降りた。

「ではいよいよ注目の第1ステージが始まりま〜す！！」
会場が熱気を帯び始めた。

第4話（後書き）

次回↓21日

第5話

第1ステージの控え室に各チームが集まり、それぞれに作戦会議が始まっていた。

N女子大は抽選の結果、3番目の、最後のチャレンジとなった。アサギがメンバーに確認をとった。

「いい？ 私が先頭に行くから、みんなちゃんと付いて来てよ」

「はい」

「悲鳴はあげないように、楽しく会話をしながら行こう」

「はい」

「竹下さん？ 少し肩の力を抜いて、私達の後ろにちゃんと付いてきてね」

「は、はい……」

弱気な声が返ってきた。

しかし彰子だけでなく、ルカやルミも緊張の色は見えた。

控え室に係員が入ってきた。

「皆さん準備はできましたか？ では大まかな手順をご説明いたします。第1ステージはA大学、B女子大、N女子大の順に行ってください。入口はこちらの赤いドアになります」

係員は手でドアを指し示す。

「入る前に必ずドア横にあります特殊めがねを全員着用してください。着用しなかった場合、失格となりますので注意してください。また、この控え室には会場に設置されているようなモニターはありません。その代わりに、ドアの右手に電子パネルがあります。そこに、現在挑戦中の大学名、スクリーン値、失格になった人数などが表示されます。失格になった人は、めがねを外し、この赤いドアから控え室に戻ってきてください。以上です。それではA大チームからお願いします」

ついに決勝大会が始まった。

スタートしたのはA大学。4人が赤いドアを開け、慎重な足取りでステージ内に足を踏み入れた。

BチームとNチームの視線は電子パネルに注がれていた。Aチームの経過を見守った。

そして、屋敷に入って数分でスクリーン値は序々に上昇、80まで上がった。

中では未知なる恐怖が始まっているのかと思うと、緊張感が増す挑戦者達であった。それに引き換え、終始震えが止まらない彰子であった。

その後もスクリーン値はグングン増え、ついには340に。

そして開始から10分。会場アナウンサーの大きな声が控え室にまで聞こえてきた。

「おお、出てきました！ 結果はA大チーム4人全員クリアでスクリーン値は420となりました！」

会場の拍手も控え室にまで響く。

ルカが聞いた。

「アサギさん。420スクリーンっていう数字はどうなんでしょう？」

「ちょっと分からないわ」

アサギ達にとつて初めての決勝。スクリーン値については詳しく理解していなかった。

しかし前大会優勝のB女子大は違った。Bチームの主将である進藤の声が聞こえてきた。

「420ポイント。けっこういい得点ね」

「進藤さん、そんなにですか？」

「悪くないわね。結構手ごわい相手かもしれないわ。私達も行くわよ」

「はい！」

気合を入れるBチーム。

その話を聞いたアサギは思った。

「――経験もあるし、実績もある。相手が悪いってものだろ」
アサギは弱気になっていた。

しかし勝負は最後まで分からない。余計な考えは振り払った。
そしてB女子大の出番がきた。

落ち着いた様子でステージ内へ。貫禄すらうかがえる。

Aチームに比べ、明らかに短時間でアナウンサーの声が響いた。

「B女子大チーム出て参りました！こちらも全員クリア！スク
リーム値はなんと180！！これは凄い！！」

アサギらはB女子大の力を見せつけられた。

「180スクリーム……さすがね。でも私が思うに、決勝大会の
マスコットキャラはまだ登場していないと思う。タタリンっていう
メチャ怖いヤツらしいんだけど、それが出ているとしたら、もっと
チーム総崩れになるはずだから」

「そうなんでしょうか……」

「分からないけど、とりあえず気楽に行こう」

「うん」

N女子大は円陣を組んで、気持ちをひとつにした。

アナウンサーの声が聞こえる。

「さて続きましては第1ステージ最後の挑戦でありますN女子大チ
ームです！」

そして係員からも開始の合図があった。

彰子はバクバク状態であった。

「――ああ…… ついに来ちゃった！ 神様！ 助けて！」
心の中で必死に叫んでいた。

そしてついに赤いドアが開かれ、Nチームの挑戦が始まった。

開始わずか数分後、入口のドアが勢いよく開き、彰子が泣きべそ状
態で出てきた。特殊めがねは手に持っていた。

「ムリムリ…… こんなの絶対無理……」

へたり込む彰子に係員が近寄り声をかけた。

「大丈夫ですか？」

そして係員の肩を借り、椅子まで連れていってもらった。

電子パネルには、すでに310スクリーンと表示されており、×印がブザー音と共に点滅していた。

一人失格になったことを意味していた。

アナウンサーの声が聞こえた。

「ああ〜！ 早くもN女子大300スクリーンを越えてしまった！

そして失格者が出ました！」

その声は彰子の耳に届いていなかった。

そうとうな絶叫をしたことは明らか。

それを察した係員がお茶を持ってきてくれた。彰子はそれを飲みながら気持ちを落ち着かせた。

Nチームのスクリーン値はその後も400から450と上がり続け、もう一人失格者を出した。

ル力が赤いドアを開け戻ってきた。

言葉も出ない様子で彰子の隣に座った。

係員はル力にもお茶を出した。

他のチームと比べると、多少時間はかったものの、ようやく……

「おお！ 出てきました！ 二人の失格者を出しましたが、なんとかゴール致しましてN女子大チーム第2ステージ進出です。成績は680スクリーム！ やや他の大学に遅れをとりましたが、まだまだ分かりません！ この先が楽しみです！ さて、第2ステージの開始は1時間後です！ それまでしばらく休憩となります」
アサギとルミが控え室に戻ってきた。アサギが声をかける。

「二人とも大丈夫だった？」

「……」

彰子とル力は小さく頷くのがやっとであった。

「恐さは予想以上だったわ。アサギさんは？」

「同感ね。正直、他のチームの成績から勝手な想像していたけど、AチームもBチームも強敵だし、ステージの恐さも予選とは比べ物にならないわ」

アサギの感想を聞き、ルカは聞く。

「そういえばタタリンは出てきたの？」

「出てきたよ。後半にね」

「どんな？」

「窓ガラスが突然割れて現れた。幸い遠くだったから何とか近づかれる前にゴールできたけどね。でも姿はかなりヤバかったよ。思いつくと鳥肌がたつわ。近距離では見たくないわね」

「特殊めがねをしているせいか、もの凄い臨場感あるし、足もすくんじやつて……」

「厳しい戦いになりそうね」

「優勝なんて絶対無理ですよね……」

「まだ1ステージが終わったただだから私は諦めてはいないけど、無理だったとしても特別賞をもらえるチャンスもあるわけだから、最後まで頑張ろう」

「そうね」

ルカは立ち上がった。しかし彰子は一言も話すどころか、まだ立ち上がれなかった。

「竹下さんも無理しないで、恐かったらさっきみたいにすぐに出てきちゃっていいから、もう少しだけ頑張って」

「はい……」

仲間に支えられ立ち上がった。

しかし彰子の本音としては、全員失格になって終わってくれればよかったのに…… というものだった。

気を取り直して第2ステージの控え室へと移動した。

第5話（後書き）

次回↓22日

第6話

1時間後。舞台の設置が終わり、第2ステージが始まった。

第2ステージもAチームの挑戦で始まった。

またしても電子パネルに目が釘付けとなる控え室のメンバー達。

誰もが、そのパネルの変動などからステージの内部を予想するのであった。

自分達の挑戦の時に、その知識が活かせるからである。

しかし間違った予想をしてしまうと、第1ステージのアサギ達のように、気楽に行きすぎて、逆に手痛い目に遭うこともある。

また恐怖が増幅してしまう可能性もある。

その辺りも駆け引きなのだ。

Aチームは常に先入観ゼロの状態でステージに臨もうと、先方をあえて選ぶという作戦だった。

各チームとも独自の作戦を考えていた。

Aチームは順調に進んでいたが、開始3分。突然スクリーン値が0から250に跳ね上がった。そしてブザーが鳴り、一人の失格者を出した。

赤いドアを開け、控え室に戻ってきたAチームメンバーの表情を見ても、第1ステージよりも遥かに恐ろしく、手ごわいに違いないと誰もが予感した。

Aチームはその後一人の失格者を出し、540スクリーンで第2ステージを突破した。

アナウンサーの声が聞こえる。

「さあ！ A大チームは540スクリーン。第1ステージから通算すると960スクリーンとなります。しかし第1ステージを軽々全員でクリアしたAチームが、二人の失格者を出すというところから

見ましても、このステージの難易度が伝わってきます！ さて次はB女子大です！」

Bチームの挑戦が始まった。

注目の結果は、開始からわずか10分後だった。

「おおっと！！ B女子大チームが出てきました！ しかもこれは凄い！ 失格者ゼロの全員クリア！ スクリーン値も220！！1ステージから通算しても、400スクリーンという圧倒的なスコアだ！！ これが前大会優勝大学の實力か！」
一際大きな歓声が響いた。

B女子大の応援団の熱狂が伝わる。

「さて続いてはN女子大です！」

その声に、アサギは立ち上がると声をかけた。

「よし！ みんな行くわよ！」

「うん、頑張ろう！」

メンバーが一齐に立ち上がった。

アサギは一端冷静になると、一人一人に注意点の確認を行った。

「まず、ルミはいつもどおり楽しく話しかけて」

「分かった」

「それとルカは、今回ルミと代わって3番目から付いてきて。私かルミに何かあったら冷静に判断してよ」

「OK」

「最後に竹下さんだけど……」

「はい！」

彰子は極度の緊張からか、異様なほどハイテンションになっていた。それを落ち着かせようとアサギも声を静めて。

「たぶんこのステージも怖いと思う。もし恐かったら失格になってもいいけど、絶叫したり悲鳴を上げるのはなるべくやめて。私達もつられて、ポイント的に大きなロスになっちゃうから」

「はい…… すみません……」

彰子は反省した。

しかし彰子自身、必死に我慢してはいるのである。

「じゃあいくわよ!」

再び円陣を組んで気持ちをひとつにしたNチーム。

赤いドアを開け、屋敷の中へと足を踏み入れた。

しかしまたしてもそのわずか2分後。勢いよくドアが開くと彰子が飛び出してきた。

ハアハアと呼吸が荒くなっている。

さながら2分間でマラソンを走り終えたかと間違えそうなほどの変わりようである。

やれやれといった様子で係員が彰子を椅子まで連れて行く。そしてお茶を出す。

パネルはすでに360スクリーンになっていた。

彰子は気持ちでは頑張ろうとは思うのだが、体が勝手に逃げ出すのであった。

気が付くと目からは涙がこぼれた。

恐怖からか。不甲斐なさからくる悔し涙か。

おそらく両方であろう。

しかし第2ステージはN女子大チームにとって、かつてない過酷さとなった。

開始10分のことであつた。

スクリーン値が突然680にまで跳ね上がった。そして一人の失格者を出した。

赤いドアを開けて控え室に戻ってきたのは、なんとアサギであつた。チームの柱であるアサギがまさかのリタイア。そのわずか数分後。今度はルミが失格となった。

第1ステージをクリアした2人の失格で窮地に立たされたN女子大チーム。

スクリーン値は820になっていた。

しかし直前のアサギの指示通り、ルカが役目を果たした。

アナウンサーの叫び声。そして会場が沸く。

「今出てきました！ N女子大チーム！ 三人が失格となりましたが、最後、一人になりながらも見事ゴールに致しまして、かろうじて第2ステージクリアです！ しかし結果は820スクリーン。トータルになると1500スクリーンとなり、この時点で優勝は厳しくなりました！」

控え室にルカが戻ってきた。アサギとルミは立ち上がった。

「ルカありがとう。よく頑張ってくれたわね」

「うん。恐かったけどね。スクリーン値も抑えられなかった」

「いいよいいよ。これで最終ステージに進めるんだもの」

「でも優勝は厳しくなったわね……」

「こうなったら、後は最後までやるだけでしょ！」

「ここまで来たんだから、そうよね」

ステージクリアを喜ぶメンバー達。するとアサギがルカに。

「ちょっとルカにお願いがあるんだけど……」

「何ですか？」

「最終ステージはあなたに先頭をお願いしたいの」

「ええ？ 私が？」

戸惑ったルカであったが、アサギを察した。

「分かりました。アサギさんずっと先頭でしたもんね。今度は私が代わります。でも期待はしないでくださいよ」

「ありがとう。最終ステージもクリアして、全ステージ制覇を目指して頑張りますよ」

「ええ」

アサギ、ルカ、ルミは疲労感こそみられるが気持ちを入れなおした。彰子は話は聞いていたが、まだ立ち上がれなかった。

「——大丈夫。アサギさん達が全部やってくれるんだから、私は何もなくていいのよ」

自分の心にそう言い聞かせていた。

しかし心のどこかに、自分が大きく足を引っ張ってしまっていることへの責任感も感じていた。
そして、残すは運命の最終ステージのみとなった。

最終ステージ開始にあわせて、会場には人の数も多くなってきた。
進行役アナウンサーがステージに上ると、ムラヨシも姿を見せた。

「さて最終ステージがまもなく行われますが、ムラヨシ先生。ここまでの展開をどうご覧になっていますか？」

「はい。正直どのチームも私の予想以上でした」

「なるほど。さすがに厳しい予選を勝ち抜いたチームということでしょうか」

「そうですね。中でも驚いたのは3チーム揃って最終ステージに残ったことですね」

「そうですね。3チームの中でも格の違いを見せ付けているのがB女子大でしょう。なんとここまで一人の失格者も出していません！これについてはいかがですか？」

「まさに驚きですね。ここまで400スクリームという数字も驚きです。これは自慢にはなりませんが、私もこの屋敷を作ったときに自分でも入ってみて試しましたが、2つのステージを終えた時点で500スクリームを越えていましたから。ハハハ」

「先生でさえも！？これは面白い話を聞きました。それだけ恐いということですね。しかもお一人で500ということは、B女子大チームは4人でさらに低いスクリーム値で抑えているということですから、これがいかに凄いことが分かります」

「同感です」

「さてそうなるそうですね。ムラヨシ先生？最終ステージもあつけなく突破してしまうのではないのでしょうか？」

「ハハハ。ところがそうはいきませんよ」

「おや？これは意味あり発言ですか？」

「私は昨年も、この決勝大会でB女子大チームに楽々と攻略されてしまいましたからね。今年はそうはいくまいと力を入れました。特にこの最終ステージ。私もまだ自分で体験すらしていません。というより恐くてできないというのが本音です。スタッフ数人に試してもらったところ、皆数日間は、ろくに睡眠が取れなかったと話しています。もちろん男性スタッフですよ」

「ななな、なんと」これは最終ステージにして最恐のステージであることに間違いはなさそうです！」

「詳しくは語れませんが、何が起きるかは分かりませんよ……」

「これは爆弾発言です。ますます最終ステージが見ものです。楽しみになってきました！」

見所を語るとムラヨシはステージから降りた。

「さあ、会場にも人の姿が多くなってきたように感じます！ まもなく運命の最終ステージです。果たして優勝するのはどの大学か！？」

運命の時間が近づくにつれ、アナウンサーもヒートアップしていった。

ちょうどその頃、会場に一人の女子大生が姿を見せた。

人の山に身動きが取れないながらも、背伸びをして辺りをキョロキョロと見渡す。

「——うん。彰ちゃんいないな。心配になって見に来ちゃったけど…… 大丈夫かな……」

紛れもない、美香であつた。

大会直前のドタキャンもあり、顔を出しづらかったのだが、彰子が心配になって会場に駆けつけたのである。

到着したばかりの美香が周りをキョロキョロしていると、近くで『彰子』という名を誰かが口にした。

耳をそばだてると、どうやら彰子の話をしているらしい。

N女子大の学生のようなだ。

「まったく彰子ときたら全然ダメなんだから」

「仕方ないわよ、読書サークルだもん」

「私達だって代わりに出たら同じようなもんじゃない？」

「それでも、屋敷に入るなり、すぐ喚いて飛び出すのは酷すぎない？」

「その恐さは彰子にしか分からないわよ。だって私達はあの特殊めがねをしていないから…… モニターに写る画面は全然恐くはないけどさ。彰子はめがねをしてあの中にいる訳だから、その恐さは私達には分からないわよ」

「それに彰子は人一倍恐がりだものね」

「やっぱり止めてあげたほうがよかったのかしら……」

「でも仕方なかったのよ。オカサーのメンバーに穴がきちちゃったから。それも例の彰子の友達だっていうし。あの子が出るしかなかったんじゃない？」

「出たのはいいけど、ここまで完全な足手まといになっているわよね」

「なんだか彰子の友達っていうだけで、ちょっと私恥ずかしいわ」

「それは言いすぎじゃない？ 彰子も頑張っているわけだし……」

「それはそうだけど」

「でも他の3人はちゃんとステージクリアして、こうして最終まで残ったわけだから、それは立派よね？」

「そうね。私達はこれ以上彰子が恥をさらさないように願うだけね」

「同じサークル仲間なんだしさ。最後まで応援しようよ」

「そうだよ。私達が応援しないでどうするの!？」

「分かったわ。ガンバレ!! 彰子!!」

その集まりは、彰子のサークル仲間だと分かった。

しかし会話の内容一つ一つに美香の心は痛んだ。

「——ごめん彰子。私のせいで酷い目に……」

美香は心から詫びた。

そして願った。ただひとつ。何事もなく終わってくれることを……

美香は祈る気持ちで最終ステージの開始を待った。

第6話（後書き）

次回↓23日

第7話

そして、ついにその時がきた。

最終ステージのセットが完了した。後は開始を待つのみ。

控え室に集まるどのチームにも緊張の色は見えた。恐怖と緊張と気合が入り混ざった独特な空気となっていた。アナウンサーの音が響いた。

「さあいよいよ最終ステージです！ 果たしてこのステージを制し、優勝を手にするチームはどこなのか！？ このステージもA大学からのスタートです！」

円陣を組んで気合を入れたAメンバーは、赤いドアを開け中に入っていた。

控え室で待つ全員にも、緊張感が伝わってくる。

電子パネルから目が離せなかった。

開始早々、Aチームのスクリーン値は予想外に安定していた。今までのペースでは、序々に10や20ずつ上昇することが多かったが、数値は0からまったく動かなかった。

ル力が言った。

「アサギさん。最終ステージは、そのわりに穏やかなのかも」

「まだ分からないよ。それに、前のチームの状況を見て、こっちで勝手な予測を立てるのはやめたほうがいい。私はそう決めたからね」

「そうですね……」

10分が経過。しかし未だにスクリーン値は20であった。今度はルミが。

「アサギさん。どういうことでしょうか？ 本当に何もありませんか？」

「うーん。分からないけど、最終ステージだけスクリーン値の基準

が変わったのかな……」

「この様子だと私達もクリア出来そうですね」

そんな言葉を口にしていた時だった！

突然、これまで穏やかであったスクリーン値に異変が！

20から200。200から400。400から800。800から1200！

そして次々に×印がパネルを埋め尽くし、瞬く間に×4つとなった。一瞬の出来事であった……

パネルを見ていたBチームもアサギらも、何が起きたのか瞬時に把握できなかった。

機械の故障かと思った。

しかしアナウンサーの声で、それが現実のものと分かる。

「ああ……つとー！ 何ということでしょう！ Aチームまさかの全員失格！！ しかもスクリーン値は1590だ！ いったいどうしたのか……！？ 何が起きたのか……！？」

会場からどよめきが起こった。

「A大学が全員失格……」

アサギの口からも驚きの声が漏れた。

赤いドアから出てきたAチーム4人の顔は青ざめていた。いったい彼女達は何を見たのだろう……

次は注目のB女子大である。

BチームはAチームの事態を目の当たりにしても、まるで動じる様子はない。

落ち着き払っていた。

「いったい何なんだ、あいつらは……」

思わずそんな言葉がアサギの口からこぼれた。アナウンサーの声が。「さあこれは驚きました。ムラヨシ先生の言っていたのはこのことだったのでしょか！ これまで第1、第2ステージを順調にクリアしてきたA大学がまさかの失格！ どうなってしまう最終ステ―

ジ。しかし次はB女子大。ここまでずば抜けた成績で、一人の失格者も出さずに進んできました。注目いたしましたしょう。B女子大チームです！」

そしてBチームが赤いドアを開けた。

アサギらの緊張は高まる一方であった。

彰子はというと、心ここにあらずといった様子でぼんやりと状況を見ていた。

Bチームも出だしは順調に、スクリーン値0を維持した。

いつになっても0から動く気配がないほどの安定感を見せた。

しかし入ってから8分。またしてもそれは起きた。

突然スクリーン値が急上昇。

瞬く間に200…500…800…と増え、×印が付いた。

そして×の数が増えてゆく。

Aチームの再現を見ているようであった。

アナウンサーの叫び声が響く。

「なんてことでしょう！ あのB女子大チームまでもが、この悪魔の罠に飲み込まれてしまったか！？ スクリーン値が上がってゆく！！ そして失格者がまたしても続出！！ B女子大も全員しつか…… おや、待つてください！ 残っています。1人だけ残っています！ B女子大チーム、3人が失格となりましたが、かろうじて1人残っていました！」

そして、その3分後。

「今、赤いドアが開いてB女子大のメンバーが出て来ました！！

見事最終ステージクリアです！！」

これまでにない歓声が沸き起こった。

控え室の赤いドアが開き、失格になったBチームの3人が、疲労の色を見せながらも、喜びの表情を浮かべ出てきた。

そして見事ゴールしたメンバーも控え室に飛び込んでくると、全員で抱き合った。

ゴールしたのは主将の進藤ではなく、別のメンバーであった。

「それにしても驚きました！ 一時はA大学に続いて全員失格の危機かと思われましたが、一人でよく頑張りました！ しかしこまでまるで隙のなかったB女子大チームがこのような事態に陥るとは、誰が予想したでしょうか！ いったいこの屋敷の中に何が潜んでいるのか！？ なんだか私まで恐ろしくなってきました。さあ注目のスクリーン値は、なんと1300スクリーンです！ これで全ステージ合計すると1700スクリーン！ この後ラストに登場するN女子大の現在のスクリーン値が1500なので、その差は200！

これでB女子大、優勝に大きく近づきました！」
喜びがおさまらないBチームは控え室から飛び出すと、会場にいた応援団に囲まれ、さながら優勝が決定したかのような騒ぎとなった。

会場は失格になったA大学、優勝をほぼ手中にしたB女子大の応援が減り、N女子大の学生とその応援が大半となった。人の数はピーク時のほぼ半数ほどになった。

「これはB女子大！ 完全に優勝を確信しているようですが、まだN女子大チームが残っています！ 最後、頑張ってもらいましょう！」

B女子大の応援団の、割れんばかりの歓声と熱気で、アナウンサーの声が控え室まで届かぬほどであった。

Nチームはひたすら気持ちを落ち着かせ、集中していた。
そして出番が回ってきた。ルカが聞く。

「アサギさん。どうします？ 優勝は絶望的ですね」

アサギは真剣な面持ちで何かを考えているようで口を開かなかった。
なのでルミが対応した。

「でも、もしこの最終ステージをクリアできればA大学よりも上にはいけるってことですよ？」

「それもそうね。たとえスクリーン値が高かったとしても、失格さえしなければ準優勝できる」

「ビリじゃなければ私達のメンツも十分じゃない？」

「でも大丈夫かしら…… だってAチームばかりか、B女子大チームまであんなに失格者を出してるってことは、桁違いの恐さってことでしょ？ 私達の全員失格も目に見えてない？」

「それはやってみないと分からないでしょ？」

「私、アサギさんからこのステージの先頭を任されたけど、今になつて正直ちよつと自信なくなってきた……」

「それは分かるけど、みんないるから大丈夫よ」

「どう考えても失格になるのは目に見えているし…… ねえ、どうかしら？ もう棄権できないかな……」

「棄権！？ それじゃ賞金もゼロじゃない。私達がこの大会に出たのは、賞金を獲得するためでしょ？」

「そうだけど、どう考えても優勝は無理な訳だし……」

「準優勝だって特別賞がもらえる可能性は十分あるわけだから諦めちゃダメ！」

「そうね。でも困ったわー アサギさん！ アサギさんはどう思います！？」

その問いかけに、アサギがついに口を開いた。

「私達が目指すのは優勝だけよ」

「ゆ、優勝！？ でも今の状態から逆転するためには200スクリーン以内でクリアしなければ…… そんなの無理に決まっています」

「そこで何かいい方法はないかって考えたんだけど…… これに決めたわ！」

次のアサギの一言に、ルカ、ルミそして彰子は耳を疑った。

「この最終ステージは…… メンバー誰か一人で挑戦するわー！」

「ひ、独りで……？」

「そうよ。4人で挑戦したら1人50スクリーンでアウトになるけど、一人だったら200スクリーンまでの余裕が出る。優勝するには、これに賭けるしかないわ」

「それはそうだけれど、あのB女子大でさえ、4人でもギリギリだったこのステージを、1人でなんて考えられません！ 絶対無理で

す。それともアサギさんが一人で行くとか？」

「いいえ。ジャンケンで決めましょう！」

その言葉に3人はさらに戸惑った。

中でも他人事でないのが彰子であった。彰子は恐る恐る聞く。

「ひとついいですか？」

「何、竹下さん？」

「私もそのジャンケンに参加しなければ？」

その質問に対するアサギの答えは冷酷なものであった。

「もちろんよ」

彰子は目の前が真っ暗に。そして反射的に。

「無理です！ 一人でなんて！」

しかしアサギは甘さを見せなかった。

「この場に及んで泣き事言わないで。恐いのはみんな一緒だし。無理だと思つのもみんな一緒。あなたも最後までくらはチームの一員として参加してもらわ！」

「でも無理はさせないって……」

「確かにそうは言ったわ。でもね…… 私達が第1ステージと第2ステージで、どのくらいの恐怖に耐えたかあなた分かる？」

アサギも追い詰められていた。

気持ちの余裕などなかった。

また、以前同じような局面で、ルカとルミが彰子のフォローに入ることがあったが、今回はそうはならなかった。

ルカとルミもアサギの肩を持ち彰子に言った。

「そうよそうよ。あなたはすぐ喚き散らして逃げ出すからわからないでしょうけど、アサギさんはずっと先頭で、第1ステージでは割れた窓ガラスから現れたタタリンの恐怖、第2ステージでは失格になったけど、タタリンが足にしがみついたり…… その恐怖あなた分らないでしょ！」

「でも、私はオカルトサークルではありません」

「そんなことは分かつてる。でも考えてみてよ。私達だってこの春

にサークルを作ってまだ半年。それまではあなたと同じ普通の学生だったのよ。あなたとさほど差はないわ」

「私も自分なりに頑張ったつもりです」

「よく言えるわよね。あなたなんて何？ 第1ステージでは風の音に悲鳴上げて逃げ出すわ、第2ステージでは猫の鳴き声で逃げ出すわ！ いい迷惑なのよ！」

「——酷い。あんまりだわ……」

いじめに近い状態。

彰子の目からは大粒の涙がこぼれた。

第1と第2ステージの極度の恐怖が、おそらくルカとルミの感情を狂わせていたのか……

もしくはAチームとBチームのあまりにも悲惨な結果を目にし、怯えていたのか……

アサギはさらに。

「それにもし優勝したら、あなただって賞金の25万をもらえる権利があるわけだから、参加する義務があるわよ」

「私…… 賞金なんていりません」

しかし時間は待つてはくれなかった。

係員が開始の準備を迫った。

アサギは慌てる。

「もう言い争いしている暇はないわ。ジャンケンいくわよ！」

アサギの掛け声でジャンケンが行われた。

瞬間的に彰子も涙でぬれた手を、その中に投げ出した！

会場では美香が祈る気持ちでN女子大のスタートを待っていた。

彰子のサークル仲間の声が美香の耳に入る。

「どう考えても無理でしょ」 やっぱ彰子が入った時点で負けが確定していたのよ」

「最終ステージまで来ただけでも上出来じゃない？」

「彰子はもう出る必要ないよね」

「まったくよ。他の3人だけで十分よね」

言葉ひとつひとつに、美香の胸は痛んだ。

そんな時、進行役アナウンサーから報告が……

そして、その言葉に会場中が衝撃を受ける……

「みなさん聞いてください。ここでN女子大チームについてのお知らせです。控え室の係員から報告が入りました。N女子大は、なんと！ この最終ステージを、たった一人で挑戦するそうです！」

その意味が分からず、静まり返る会場。

「そして、挑戦するのは……」

会場を緊迫した空気が包む。

「竹下彰子さんです!!」

第7話（後書き）

次回↓26日

第8話

アナウンサーの一言に、誰もが息をのんだ。

「ええ……！！？」

美香、そして読書サークル集団も驚きの声を上げた。

美香は嘘だと思った。自分の聞き違い。もしくはアナウンサーの言い違いに決まっている。

「——彰子がひとりで？ 何がどうなっているの？」

とても理解できなかった。アサギさん達の身に何か起きたのかとも思った。

読書サークルの仲間からも批判の声が。

「何考えてるの！？ なんで彰子ひとりなのよ！ 酷いじゃない！」
しかしそれは紛れもない現実。

またそれはN女子大チームが決めたこと。
なので、誰にも覆すことはできなかった。

「それでは最終ステージ！ ラストを飾るN女子大チーム…… ではなく…… 竹下彰子さんのスタートです！」

そして、会場がざわつく中、挑戦が始まってしまった。

挑戦者は『彰子』ただ一人である。

その時、N女子大以外のA大学、B女子大のメンバーや、その関係者は会場にいなかったため、この現状を知る由もなかった。

美香はモニターを見て、そこに写っているのが、確かに彰子であることを確認すると涙が出てきた。

手を合わせてひたすら祈った。もはやそうすることしかできなかった。

「——彰子！ もういいから棄権して！ あなたは十分頑張ってくれたんだから」

読書サークルから野次が飛ぶ。

「なんで他のメンバーは一緒に入らないのよー！！ 彰子だけに押し付けるなんて卑怯よー！」

そこでアナウンサーは独断で考えた、この作戦の意図を説明した。

「しかしこれは思い切った作戦に出たものです。おそらくB女子大との差が200スクリーンということで、4人では無理と判断したのでしよう。しかし最後の勝負にN女子大は竹下さんをたててきました。竹下さんはここまで、いまひとつ目ばしい成績を残せていません。この起用に意味はあるのでしょうか！？」

まさかジャンケンに負けただけという理由だとは、誰も知らない……

そして彰子は。

「――始まっちゃった…… 恐いな。何が出るんだろう」とにかくゆっくり歩こう」

屋敷に入って2分。

彰子は直前にアサギと話した言葉を思い出した。

「悪く思わないでね。今までと同じように、無理はしなくてもいいから……」

「分かりました……」

「ただしこれだけは聞いて。第1ステージや第2ステージの時みに、何も起きていないのに、勝手にリタイアするのはやめて」

「リタイアしちゃ駄目なんですか？」

「そうは言わないけど、リタイアするなら然るべき場所でするようにつてこと。前みたいに屋敷に入るなりリタイアとか…… そういうの笑いものになるからね」

「然るべき場所って？」

「例えばお化けが出たり。このステージにも、どこかにタタリンは出るはずだから、出来ればそこまで我慢して。タタリンでリタイアだったら誰も文句は言わないわ。会場にはN女子大の応援が沢山来ていることを忘れないで」

「タタリン？」

『そうか。あなた見ていないのよね……　いわゆる女のお化けよ。でも大丈夫。凄く可愛いくて、優しそうな感じだから』

『分かりました。自信ないけど、やるだけやってみます』

『お願いね。今回は私達がフォローしてあげられないけど、頑張つて』

こうして肩をたたかれ送り出されたわけだ。タタリンが可愛いなんて絶対嘘だということくらい感じていた。恐怖心を与えないための工作であることくらい。

しかしアサギも心身疲れ果て限界であったのだろう。

普通ならば彰子がジャンケンで負けた時でも、優勝のために自分が行くと自ら買って出るタイプの人間だ。

それがなかったということは、すでに勝負を投げ出したものと彰子は勝手に認識していた。

それがかえって気持ちを楽にさせた。

今回も前回のステージ同様、入口で逃げ出してしまうかもと心配したのだが、この最終ステージは赴きが違った。

第1、第2ステージは、舞台が学校と病院といった屋内だったのに対し、今回は屋外であった。

井戸があちらこちらに点在し、古びた民家が見える。草は生い茂り、時刻は夕暮れ時といったシチュエーションであった。

彰子にとっては意外であった。お化け屋敷の中にいることを忘れそうな光景だ。

少しは進めそうかと思った。

ゆっくり歩き続けた。

生き物のいる気配はない。

何よりも暗闇でないことが彰子にとっては救いであった。

控え室で見守るアサギらも、祈る気持ちで電子パネルを見ていた。ルカがスクリーン値を見て驚いた。

「アサギさん凄いですよ。まだ0スクリーンです。あの竹下さんが」

「ホントね。最終ステージは後半に恐怖ポイントがまとめてあるみたいね」

「竹下さん、ひとりで行っちゃったけど、気絶とかしなければいいけど……」

彰子はゆっくりであるが、沈み行く夕日を見ながら落ち着いて歩いていた。

風もなければ、恐ろしい効果音などもない。

「——最後までこんな状態が続けばいいのに……」
そう思っていた。

しかし屋敷に入ってから10分後。

日は沈み、辺りに闇が落ちてきた。

「——さあきたぞ。暗くなってきた。でもまだ少し明るいから行けるところまで行くしかないわね」

彰子は夕方の学校の帰り道をイメージして足を動かし続けた。

気のせいかな。周りの風景は彰子の生まれ故郷に似ている気がした。

どこことなく子供のころに返り、夕方まで遊んだあのことを思い出したりする。

回想にふけようかと思う彰子の前に、突如大きな看板が見えてきた。

古びた奇妙な立て看板。

それによって一転、現実に引き戻される彰子。

なにやら字が書いてある。

それは血文字で書かれていた。

「いやああ。怖い怖い……」

彰子は怯えながらも字を読んだ。こう書かれていた。

『仲間がひとり、いないよ』

彰子には意味が分からなかった。

周りを見回してみる。

しかし誰もいない。

当然である。いるのは彰子だけだ。

「なんだろうこれ。控え室にいる仲間は関係ないよね……」

いささか考え込む彰子だったが気にせず先に進んだ。

しかし日はみるみる落ち、ついには完全に暗闇となった。

あちらこちらに外灯の明かりが灯る。

「ついに真っ暗になっちゃった！ でもアサギさんに言われていた
つけ。お化けが出るまでリタイアしちゃいけないって。我慢我慢…

…」

心臓は高鳴っていたが足取りはしつかりしていた。

子供の頃、遅くまで遊んでいる内に日が暮れて、迷子になったことがあった。

家に帰る道が分からなくなってしまい、何処までも歩いていた日の記憶が甦ってきた。

「——あの時を思い出すな。恐くてひとり歩き回って、最後はパトカーに乗せてもらって帰ってきたんだっけ」

彰子は過去の回想をすることで、恐怖を和らげていた。

「——あの時は偶然近くにお巡りさんがいて、私に気付いてくれた
んだった…… 懐かしいな」

すると前方に赤い光のようなものが。

「あれ、なんだろう？」

彰子はパトカーのサイレンと見間違えた。

無意識に足はそちらに向かった。

控え室のメンバーは中の様子がまったく把握できていなかった。

「アサギさん。竹下さん入ってもう15分ですよ。いまだにスクリー

ム値が90ってどういうことでしょう？」

「分からないわ」

「もしかして中で気絶しているってことないですか？」

「それだったらスクリーム値がもっと跳ね上がるでしょ？」

「でも、声を出す間もなく失神することもあり得るでしょ？」

「あるけど、もし倒れていたなら失格のブザーが鳴るはずだわ」

「機械が故障しているんじゃない？　だってあの子がリタイアしてないどころか、スクリーム値が90なんてどう考えてもおかしいわ」
「そう言われればそうね。もう入ってから時間は経っている。今までの2チームが失格者を出した恐怖ポイントに到達してもいい時間帯だものね」

アサギは立ち上がると係員のもとに駆け寄った。

「あの、今挑戦している竹下彰子なのですが、中で気絶して倒れているってことは考えられませんか？」

しかし係員は首を横に振る。

「その心配はありません。中の様子は会場のほうでしっかり見ていますから。まだ挑戦中ですよ」

「本当に??」

アサギは信じられなかった。

ルカとルミの元に戻ると二人に言った。

「たぶん……　ちんたらちんたら歩いているのかも。あの子のことだから恐くてまともに歩けないのよ」

「そうなのかな……」

そんな話をしている時だった！　アナウンサーの絶叫が響いた。

「し、信じられない軌跡が起きました！　たった今、赤いドアが開き、N女子大の竹下彰子さんが出てきました!!」

アサギ達は我が耳を疑った。

「なんと90スクリームでゴール！　ということは、まさかのN女子大!!　大逆転での優勝!!」

アサギ達は呆然とそのアナウンスを聞いていた……

一方会場では、フラフラになりながらもゴールにたどり着いた彰子に割れんばかりの歓声が起きていた。

彰子はステージの眩しいライトと歓声を浴び、自分がゴールしたことを知ると、気が抜けたようにその場に崩れ落ちた。

アナウンサーが近づき手を貸した。

「大丈夫ですか？」

しかしステージに駆け上がり、彰子のもとに駆け寄る人物がもう一人いた。

美香であつた。

彰子の体を抱きかかえると呼びかけた。

「大丈夫！？ 彰ちゃん！？」

うつろな目が美香をとらえる。

「美香？ どうしてここに？」

かすれた声で聞く。

「心配になつて来ちゃった。彰ちゃん本当に凄かったよ！」

彰子は夢の中にいるようであつた。

「私…… ゴールしたの？」

「したよ！ ひとりで！ しかも優勝だよ！」

「よかった…… 少しは役に立てたんだね」

「本当に凄いよ！」

そこへ控え室からアサギ達3人がステージに駆けつけた。

真つ先に彰子に駆け寄る3人だが、すぐに美香の存在に気付いた。

「美香！ 美香じゃない！」

「木田さんどうしたの！？ 何でここに？」

「はい…… やっぱり心配っていうか、みんなの事が気になっちゃつて」

「そう。応援に来てくれたんだ」

「はい。みんなにはホント迷惑かけてすみませんでした」

美香は心から詫びた。

同時に胸につかえていたものが、すくつと取れた気がした。
アサギ達の反応は温かかった。

「気にしないでいいわよ」

「そうよ。あなたは私達と一緒に予選を戦った仲間ですもの」
「応援に来てくれてありがとう」

美香は嬉しかった。自然と涙が溢れてきた。

そんな美香にアサギが笑って。

「ちよつと誤解しないでよ。主役はあなたじゃないのよ」

「そうよ。竹下さん、本当によくやったわ!」

「私達が優勝なんて信じられないわ!」

「竹下さん大丈夫? 立てる?」

彰子は仲間の手を借り立ち上がることができた。

アナウンサーが声高々に。

「さあみなさん! 見事優勝を果たしたN女子大チームです! そして予選大会で活躍した木田さんも、駆けつけてくださいました!

盛大な拍手をお願いします!」

会場は沸き立った。

しかしその異様な盛り上がりにはB女子大関係者が気付いた。

もはや自分達が優勝したものと疑わなかったB女子大チームのメンバーとその応援団が会場になだれ込んできた。

主将の進藤がアナウンサーに尋ねた。

「ちよつといたいどういうこと!? 何の騒ぎこれ!」

「なんの騒ぎって…… N女子大があなたがたを逆転して優勝したために起こった騒ぎです」

「ちよつとどういうことそれ!? そんなはずないわ! 何かの間違いに決まっている! 第一私達は200スクリーン差だったのよ。負けるはずがないわ!」

「あなた方はN女子大の挑戦を見ていなかったようですね?」

「見ていなかったわよ。見るまでもなかったからね」

「N女子大は最終ステージを、わずか90スクリーンでクリアしました。堂々の優勝です」

「90なんて絶対にありえないわ! 機械の故障よ! ちゃんと調べてよ!」

「いいえ。故障なんかではありません」

激しく言い寄る進藤。それを後押しするのはB女子大の応援団であ

った。

その時彰子が言った。

「あのー私の話を聞いてもらえますか？」

全視線が彰子に集中した。アナウンサーがどうぞと促す。

「私が90スクリーンでゴールしたのは間違いないと思います。ほとんど声は出しませんでしたから……でも故障かな？と自分で思う点があります」

「それは何ですか？」

アナウンサーは興味深そうに聞く。

彰子は包み隠さず答えた。

「私が屋敷内にいる間。一回もお化けに会いませんでした。タタリンという人もまったく現れませんでした……」

その言葉に皆驚いた。

確かに誰もが不思議に思っている点もあった。

あまりに何事もなく彰子がゴールに到達している。

他のチームは途中で散々な結果になっているのに対し、彰子のチャレンジは順調すぎるのである。

アナウンサーが彰子に聞いた。

「タタリンが一体も出なかったというのは本当ですか？」

「はい」

「あなたが気付かなかっただけでは？」

「そんなことないと思います。まるで音ひとつない状態でしたから」その言葉にBチーム進藤が。

「ほらみなさい！ それ間違はなく故障よ！ この最終ステージにはタタリンが3体出るのよ！ しかも超至近距離で。それで私達はほぼ全員失格になったんだから」

「3体！？」

彰子は驚いた。すかさずアサギが彰子に聞く。

「本当にタタリンでなかったの？」

「はい。いませんでした。第一出たら私がクリアできるはずないで

す」

「それもそうか……」

彰子のことをよく知るメンバーは頷く。

アナウンサーがBチームの進藤に聞いた。

「できれば詳しく教えてください。どの辺でタタリンは出たのか？

その状況を」

「分かりました。お話します」

進藤の発言に注目が集まった。

第8話（後書き）

次回（最終話） ↓ 29日予定

最終話

進藤は最終ステージ内部の説明を始めた。

「最終ステージにタタリンは3体まとめて出ました。場所は大きな立て看板のある所です」

それを聞いた彰子はすぐに思い当った。

「はい。看板ありました！ 確か血文字で、仲間がひとりいない……とか書いてありました」

「そう。私が看板に書いてあったことを確認しようと振り返ると、そこにタタリンが3体立っていました…… 恐ろしい顔でこちらを見ていました」

「ええ！？」

彰子は驚いた。自分もあの時振り返ったが、確かに誰もいなかったはず。

「私も周囲を見回しましたが、誰もいませんでした」

「やっぱり！ 間違はなく何かの手違いか故障だわ！」

進藤は強く主張した。

次にアナウンサーがB女子大で唯一クリアしたメンバーに話を聞いた。

「あなたこの最終ステージをクリアした訳ですが、あたなの状況も聞かせて頂けませんか？」

「はい。私は4人の一番後ろから付いていったのですが、看板の前に立って、みんなが文字を読み終えた時、全員の姿がタタリンに変化したのをこの目で見ました」

「仲間がタタリンに！？」

「そうです。その時私は瞬時に理解しました。これが最終ステージのトリックなのだ。そのためか、とても冷静になれました」

「なるほど。それで分かりましたよ。つまりこのステージは仲間が

タタリンと入れ替わるトリックを使っていたから、一人で入った竹下さんにはタタリンは見えなかった。もしかしたら竹下さん本人がタタリンになっていたということは考えられますが……」

その時Bチーム進藤が目丸くした。

「何よそれ！？ 一人で挑戦した！？」

「ええそうですよ。ご存知なかったのですか？」

アナウンサーが説明する。

B女子大メンバーは、応援団も含めN女子大の経過や結果をまるで知らない様子であった。

その奇抜な作戦にBチーム進藤も驚いた様子。

進藤はアナウンサーに。

「確かに一人で入ったためにタタリンが出なかった可能性はありますけど、タタリンが一回も出てこないのに、クリアと認めるのは不公平ではないですか！？ もう一度4人で入ってやり直すべきです！」

アナウンサーもやや困った様子。

「それはどうでしょう…… 現に今、最終ステージのトリックを話してしまいましたから、これから再チャレンジといっても意味があるとは思えません」

「それでも、こんなインチキで優勝が認められるなんて許されるのですか！？」

進藤は一步も引かぬ姿勢をとった。

アナウンサーが渋々言った。

「それでは審査員長のムラヨシ先生をお呼びして、判断してもらうことに致しましょう。」

この事態にムラヨシが呼ばれた。

進藤の抗議が認められるか、N女子大がそのまま優勝か。

それはムラヨシの判断に委ねられた。

「さてムラヨシ先生。今の話お聞きになりましたでしょうか？」

「はい。聞いておりました。私なりに色々考えた結果、N女子大チ

ームの立てた作戦、行動に違反はありません。今回のことは私の設計したステージの穴といえますか、欠点です。N女子大はそこをついた訳ですから、文句のつけようはありません。よって、判定通りN女子大チームの優勝を認めてよいと思います」

「分りました。ということで審査員長の判断が下されました。優勝はN女子大に決定です!!」

一際大きな歓声が沸き起こった。

優勝が決まり、アサギ達は互いに抱き合って喜んだ。

逆にB女子大応援はブーイングの嵐となった。

Bチームの進藤らは納得がいかない様子ながらも、黙ってステージを降りた。

Bチームが会場を去ろうとした時、アナウンサーが呼び止めた。

「B女子大のみなさん! この後、表彰式になりますが、まだあなた方にも特別賞の可能性ありますから残っていただけますか!？」すると進藤が一言。

「私達は優勝以外、興味ないわ」

そう言うのと、会場を去っていった。

表彰式が行われた。

主将であるアサギにトロフィーが渡され、ルカが100万円の賞金を受け取った。

「いよいよ残すは審査員特別賞の発表です。ムラヨシ先生お願い致します!」

「はい。では発表します。今大会はまさに大熱戦でありましたが、最後に見事大逆転を果たしたN女子大チームが、大会を一番盛り上げたのは言うまでもありません。最終ステージの奇抜な作戦を立てた主将のアサギさんも立派でしたが、私はやはり、他のチームがこことく失格していった最終ステージを、気力で、最後まで歩ききった竹下彰子さん。私の中で今大会もっとも強く印象に残った彼女

に、特別賞を贈りたいと思います！」

「ということで、審査員特別賞は竹下彰子さんです！」

大きい歓声が起き、ステージ上に紙ふぶきが舞った。

その結果を聞き、思わず涙が溢れ、両手で顔を覆う彰子。

美香やアサギたちも自分のことのように祝福した。

そして賞金30万が彰子の手に手渡された。

アナウンサーに一言求められ。

「信じられないです。夢のようです」

と興奮を抑えられない様子で語った。

誰もが惜しめない拍手を送った。

大会が終わり、アサギ達は帰る準備を整え、バスに乗り込もうとした。

そこでB女子大チームのメンバーと鉢合わせた。

バスが隣り合わせということもあった。

アサギはBチーム進藤のもとに近づき声をかけると、相手も気付いた。

「B女子大のみなさん」

「ああ。あなたはN女子大の主将さん」

「はい。今回はなんか……正々堂々とした勝ちかたではなかったことは認めます。本当にすいませんでした」

アサギが謝ると進藤は意外な態度を見せた。

「そんなことないわ。正直驚いたよ。最終ステージに一人で挑むなんて。あなたの作戦なんでしょ？」

「はい」

「私には出来ないわね。でも好きよ。そういう大胆な発想」

「とんでもないです」

褒められるとは予想していなかったアサギは、少々照れた。そこヘルカとルミ、彰子も姿を見せた。

進藤は彰子に対しても言った。

「あなた特別賞もらったんですって？ おめでとう」

「ありがとうございます」

「あなた…… 話で聞いたけど読書サークルの人なんだって？ 驚いたわ。その度胸に。私も昔メンバーを集めるために色んなサークル回ったけど、うちの読書サークルにあなたみたいな子はいなかったわ。この決勝大会に出場できるような子はね」

「わ、私も出場したくは……」

彰子は何か誤解されている気がしたが、気にしなかった。

「とにかくおめでとう。運も実力のうちって言うからさ。今回は私達の負けを認めるわ。でも来年リベンジするからね。また決勝で会いましょう」

「ええ。こっちも頑張るわ」

アサギは力強く返した。

Bチームメンバーは笑顔を見せると、手を振りバスに乗り込んだ。

「—— B女子大チーム。本当に凄い人達だわ。今後もいいライバルになれそうかな。正直勝てる自信はないけど、来年もこの舞台で勝負したいわ」

アサギは思った。

こうしてN女子大チームの奇跡の優勝で大会は幕を下ろした。

彰子の活躍は周囲の期待以上であった。

大学に戻ったメンバーは大学中から熱い歓迎を受けた。

当然のことながら、話題もオカサーのことで持ち切りとなった。

彰子は一転、話題の的となったのである。

一番驚いたのは彰子本人ではなからうか。

大会が始まる前は、まさか自分がNチームを優勝に導き、自らも賞金の4分の1である25万と、特別賞の30万。合わせて55万といった大金を獲得できるとは夢にも思わなかったはずである。

それは彰子にとって、生涯忘れることのできない貴重な夏の思い出

となつたのは言うまでもない。

同時にこの経験は、彰子に様々な変化をもたらした。

一週間後。

ようやく大会の熱気も冷めてきた頃。

美香は彰子と同じ読書サークルに入ることになり、部員からも温かく迎えられた。

以前と違い二人が会う機会は格段に増えた。

その日、いつものように大学の講義が終わり、図書室で二人、本を読んでいるとそこへアサギが姿をみせた。

「やつほ　お二人さん」

「アサギさん」

「元気そうね。それよりどう？　二人でオカサーに入る話、考えてくれた？　正式部員として歓迎するわよ」

「そ、それは……　結構です……」

その問いには常に遠慮がちの二人であつた。特に彰子は……

「そう？　それよりも大会で優勝したお陰で、オカサーもようやく様になつてきたっていうか。部員も新たに5人増えたのよ」

「本当ですか？　やつぱり大会の影響は大きかったのですね」

「まあね。それだけじゃないの！　オカサーがN女子大の公認サークルに認定されることになつたのよ！」

「ええ！　それは凄いですね！」

「本当に嬉しくてさ　これもあなた達のお陰だからね。本当に感謝しているわよ」

「いいえ。私の方こそ、すごい大金が貰えちゃって、本当どうするか困っているんです」

「好きなことに使えば？　欲しいものとか一杯あるんでしょ？」

その問いに考え込む彰子。

今は特別欲しいものはなかった。

「まあ報告はこんなところ。じゃあまた顔出すわね。あなた達もよ

かつたらオカサーに遊び来てよ」

「ええ。きつと……」

あのサークル部屋には、未だに抵抗のある彰子であった。

アサギは以前に増して活き活きとしていた。

大会の緊張から解放されたためであろうか。

それは彰子と美香も同じであった。

美香がふと聞いた。

「ねえ彰ちゃん。獲得したお金の使い道ってあるの？」

「そうねえ。今のところはないんだけど、しいて言うなら読みたい本は一杯あるから、私もアサギさんみたいに読書サークル発展のために使おうかなって思ってる」

「それすごいわ」

「美香も何か読みたい本があったら私に遠慮なく言つてよ」

「本当に！？ さつすが彰ちゃん。実はあるのよ」

美香がさつそく一枚の紙を取り出した。

そこには自分でメモした書名が10冊ほど書かれていた。

「これ全部！？」

「うん」

まるで母親におねだりする娘のようだ。

「しかも何！？ 全部、怪談だの心霊スポットだのって、そんなのばっかりじゃない！」

「そうそう。いいでしょ？」

「あなたってやつぱりこういうのが好きなのね？ いっその事オカサーに戻ったら？」

「もう彰子の意地わる〜」

「わ、分かったわよ〜」

彰子は財布を開けた。金を手渡すと言った。

「そのかわり買って読んだら、ちゃんと図書室に寄付してもらいますからね」

「分かってるって。じゃあ先帰るね〜」

「うん。バイバイ」

上機嫌な美香は足早に図書室を出て行った。

最近では、美香は他の仲間ともすっかり打ち解けていた。美香の姿がなくなり、サークル仲間が彰子に。

「ずいぶん気前がいいのね」

「まあね。私もアサギさんを見習っていいこうと思って」

「へえ」

「最近ちよつと思っただけど……私、アサギさんのことを尊敬しているみたい」

「それマジ？ 人って変わるものね」

「本当にそう。今回の大会も今になってみれば、出て良かったって思えるし」

仲間はつくづく感心していた。

「ねえそんなことより彰子！ 美香さんと一緒に帰ったほうがいいんじゃない？ もう外暗くなってきたよ」

「いいよ。もうちよつとこの本読みたいから」

仲間はその言葉に驚いた。

「残るって、あなた暗くなっても平気なの！？」

それに対し照れくさそうに彰子は答えた。

「うん。この前の大会以来、暗い道でも平気になっちゃった」

「嘘ー 一体どういうこと？ 凄く変わりようね」

「変わったというか、人並になっただけよ」

「まるで別人ね。あなたその内、オカサーに入りたいなんて言い出さないでしようね！？」

「それは絶対にありませんから！」

図書室に笑い声が溢れた。

最終話（後書き）

おしまいです。

季節違いな作品でしたが、最後まで読んで頂きありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6097i/>

恐怖のハイテク肝試し決勝大会

2010年10月8日13時45分発行